

# 感情とステレオタイプ化

日本福祉大学教育デザイン研究室研究員

野寺 綾 (のでら あや)

## Profile — 野寺 綾

2008年、名古屋大学大学院環境学研究科博士課程満了。博士（心理学）。専門は社会心理学、教育心理学。主な著訳書は、『海外研修における学内SNSのコミュニティ機能の活用が学習動機に及ぼす影響』（共著、日本教育工学会誌、印刷中）、『社会的動機づけの心理学：他者を裁く心と道徳的感情』（共訳、北大路書房）、『罰がステレオタイプ活性に対してもつ抑制効果の検討』（共著、社会心理学研究）など。



「……でもそういう気分になるってことは、君、最近誰ともつき合っていないじゃないの？」  
急にメリリーの表情がけわしくなった。「こういうのが、頭にくるのよ」彼女は語気鋭くつめ寄る。「どうして男の人が落ち込んでいる時は『重大な存在の危機』で、女だと、単に定期的に会う男がいなくて充分満たされていないからだろうなんて、バカな理由になるわけ？」（ハンドラー／河野（訳）『フィッツジェラルドをめざした男』）

論文やテキストの冒頭にあるエピソードは、哲学者か文豪の言葉に基づく相場が決まっている。現代推理小説からの引用では少々違和感があるかもしれないが、ご勘弁願いたい。ハンドラーの小説に出てくるメリリーという名の女性は、いつも小気味よいセリフで読者（野寺）を魅了する。彼女が元夫に対して放った言葉は、彼女が落ち込んでいる理由について元夫が行う推論に、一定のバイアスがかかっていることを指摘するものである。メリリーが落ち込んでいる原因は仕事にあり、自信を失っている彼女は実は仕事を辞めようかと悩んでいるのだが、「今の彼女には頼ることのできる身近な相手（男性）がいらないから、そうした不安に対処できないのだろう」と推測されたら彼女は怒っているわけだ。もしも自分が男だったら、決してそんな解釈はなされなかっただろうに、と。

「女性は依存的だ」といった固定観念は、ステレオタイプと呼ばれる。ステレオタイプは、

ある社会集団に属するメンバーがもつ性格特性、身体的な特徴、行動傾向などについてわれわれが抱く信念だと定義される。ステレオタイプは、性別のほかにも人種や民族、職業など、さまざまな集団に対して形成されうる。ステレオタイプを用いた推測は、特定の集団に対する偏見や差別を引き起こしうるほか、集団間の紛争の生起とも深く関係している。そのためステレオタイプという概念は、今日に至るまで多くの社会心理学者の興味をひいてきた。

偏見、差別、紛争……などと言われると、通常、人はその背後に、相手となる集団に対する敵意や嫌悪、怒り、恨みといった否定的な感情が存在すると想像するだろう。たしかに、利害が対立している集団の間には憎しみが生じやすく、それに伴って相手集団に対する印象が偏見に満ちたものになることがある。だが、冒頭に出てきたメリリーの元夫は、離婚したとはいえ彼女に敵意を抱いてはいない。それどころか、彼は今もメリリーに愛情を残しており、彼女との関係の修復を試みることすら何度もあったのだ。それなのに……彼の発言は、メリリーには「女性に対する偏見だ」と解釈され、彼女を怒らせてしまった。

## ステレオタイプの構造と対象に対する感情

元夫が今もメリリーを愛しているのなら、彼が示したのは「好意を伴う偏見」とでも呼ぶべきものになりそうだが、そのような偏見が実

際に存在するのだろうか。そもそも、相手や相手の所属する集団に対して抱く感情とステレオタイプ化との間には、どのような対応関係があるのだろうか。近年の研究知見によれば、こうした問いに答えるには、ステレオタイプの構造を理解する必要がある。

ステレオタイプは必ずしも、ネガティブな特性でのみ構成されるのではない。例えば「女性ステレオタイプ」は「依存的」「弱い」のようなネガティブな特性のほか、「気がきく」「家庭的」といったポジティブな特性をも含んでいる。フィスクらは「ステレオタイプ内容モデル」を提唱し、多くのステレオタイプがネガティブとポジティブの両方の特性で構成されていることを指摘している（Fiske, Cuddy, Glick & Xu, 2002）。このモデルによれば、ステレオタイプは「温かさ」と「有能さ」という二つの次元に基づいて構造化されている（図1）。「温かさ」の次元は、人柄の良さ、親しみやすさなどを意味しており、「有能さ」の次元は、頭の良さ、行動力の有無などを表す。「仕事はできないが、愛嬌がある」（図1の第4象限）や「頭はいいが、冷血漢だ」（第2象限）のように、次元間に相補的關係が成立しているステレオタイプは、ポジティブ特性とネガティブ特性が混合したステレオタイプだといえる。

またこのモデルによれば、ある集団に対して

われわれが抱く感情の種類も、形成されているステレオタイプの内容に応じて異なる。「有能だが、冷たい」とされる集団は、金持ちやキャリアウーマンが典型だとされ、この集団に対しては嫉妬やねたみが喚起される。またこれらの集団は敵対心が強いという印象をもたれやすいため、敵意を向けられることもある（キャリアウーマンに対する敵意についてはGlick & Fiske (1996)を参照）。他方、「温かいが、能力を欠く」とされる集団に属するのは、老人や障害者、女性一般（とくに主婦）である。これらの集団は、憐れみ、同情、共感、優しさといった肯定的感情を向けられる。そのため、このステレオタイプは、温情主義的ステレオタイプ（paternalistic stereotype）<sup>1</sup>と呼ばれる。肯定的感情を伴うことから、人は温情主義的ステレオタイプに基づく判断を行うことに対して抵抗感を得にくく、「この判断が偏見につながるかもしれない」という意識をもつことが少ない。

#### 温情主義的ステレオタイプに秘められた甘い罠

たとえポジティブな特性で表現され、表明に肯定的感情を伴うステレオタイプだからといって、それがまったく偏見や差別の起源とならないわけではない。というのも、ステレオタイプの内容は、集団間の関係性を反映し、その関係性を維持する機能をもつからである。ジェンダ

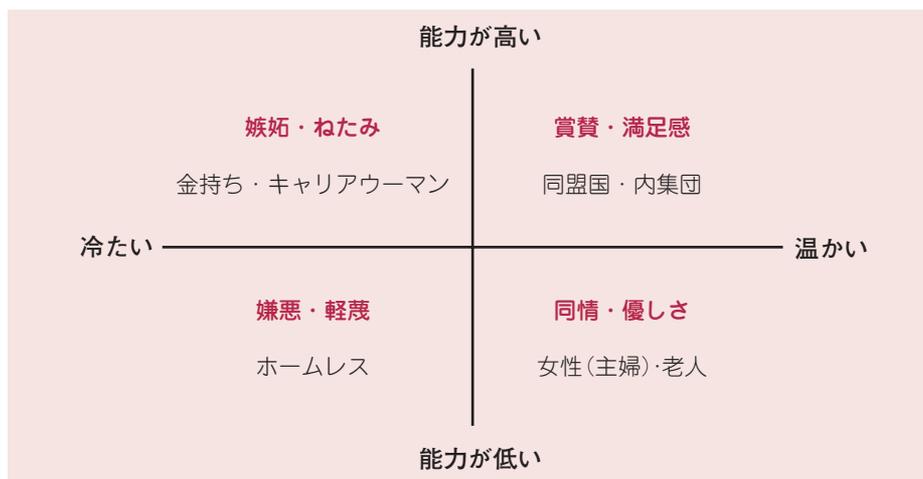


図1 ステレオタイプ内容モデルによる「温かさ」×「有能さ」の4集団の分類  
各集団に対して抱かれる感情は赤字で表記

一を例にとるならば、「女性」を、家庭的で愛らしく、男性に依存し守られるべき存在として描くことは、男性が社会的・経済的に優位に立ち、女性が男性の補佐役（女房役）を担うという伝統的な性役割の関係性を肯定することにつながる。ステレオタイプは単に対象の特性を記述するだけではなく、どのように振る舞うべきかを示す規範としても機能するため（Fiske & Stevens, 1993）、こうした役割関係を肯定することは、キャリアウーマンに対する否定的感情の表明と同様に、仕事上のキャリアを積み、出世し、社会的に成功しようとする女性の生き方を否定し、彼女たちに男性の補佐役を強いる可能性を秘めている。

このように温情主義的ステレオタイプもまた、偏見や差別の原因となりうるが、それにもかかわらず、このステレオタイプは集団間関係において劣位にある側にも受容されやすいという特徴をもつ。その理由は第1に、温情主義的ステレオタイプの相補性が、われわれに平等幻想を抱かせるからである。「ある次元で優れている者は、別な次元で劣っている」という相補性は、ある次元で不平等が生じて、それは別な次元で補償されているという期待をわれわれに抱かせる。そのため、われわれは「世の中はうまくいっている」と思い込みやすい（池上, 2009; Kay & Jost, 2003）。例えば、社会的成功を諦めて主婦業をこなす選択をした女性を、それが分相応であり幸せなのだとして納得することは、彼女の葛藤や選択の背景にあったであろう「社会の不平等」からわれわれ（男女問わず）の目をそらさせる。また第2に、温情主義的ステレオタイプは肯定的感情を伴って表明されるため、劣位者側は偏見を示されたという認識を得にくい。このため、温情主義的ステレオタイプに基づく偏見は、広く受容されやすいと考えられる。

近年、国内外を問わず、ステレオタイプの相補性に着目した実証研究が精力的に行われている。例えば筆者らはジェンダーステレオタイプを題材に、ある特定の状況におかれると、男性を仕事上の能力と、女性を家庭的な性質と結び

つける傾向が、性別およびその人がもっている男女平等主義的な態度によらず高まることを検証している（野寺・唐沢・沼崎・高林, 2007; 野寺, 2009）。たとえば普段は男女平等の性役割観を支持している女性（キャリア志向の女性）であっても、状況によっては温情主義的ステレオタイプを受容する可能性があるのである。また、筆者らはこの一連の実験で、こうした反応が意図せず自動的に表出されるという点をも検証した。温情主義的ステレオタイプに基づく思考や判断を自分が行っている、あるいは受け入れている可能性について、人は無自覚だといえる。

温情主義的ステレオタイプの「甘い罠」は、それをういた判断が、結局のところ現行の集団間関係（社会制度を含む）の維持につながることにある。しかし、肯定的な表現や感情を伴っているがゆえに、その罠は見えにくい。フィスクによれば、これまで多くの偏見研究者は、ステレオタイプの種類が違ってもステレオタイプが判断に利用される過程は共通だという前提のもと、もっぱら偏見表明に至る過程の解明にのみ目を向けていた（Fiske, et al., 2002）。だが、ここまで述べてきたように、ステレオタイプの構造とステレオタイプが対人関係において果たす機能とは密接にかかわっており、切り離して議論することができない。偏見の表明や維持の過程を理解するうえでは、ステレオタイプの内容をも考慮する必要があるといえるだろう。

### ステレオタイプ化を制御する感情

ここまで、ステレオタイプ化に伴う感情についての研究知見を紹介してきた。最後に、特定の感情の生起によってステレオタイプに基づく判断を回避することが可能なのか、という問題について述べたい。

近年注目されているのは、「罪悪感」が偏見の制御において果たす役割である。デヴァインらは、偏見を表明した後に強い罪悪感が生じた場合、その経験が、将来の行動を制御（偏見を回避）するきっかけとなると指摘している（Devine, Plant, Amodio, Harmon-Jones & Vance, 2002）。われわれの多くは、自分が偏見的な偏

値観をもち、差別的行動をとる人間であるということを好まない。それは、差別の被害者や第三者から非難をあびるのが嫌だからという理由のみならず、不当に人を虐げ、傷つけることに対して罪悪感を抱くからでもある。こうした罪悪感は、以前偏見を表明したのと類似した状況に再び置かれた際に、あたかも結果を予想するように喚起され、偏見を回避するきっかけをわれわれに与える。デヴァインらは、罪悪感を抱いた経験のある人は、たとえステレオタイプを形成していたとしても、その影響が判断に及ぶ前にすばやく判断を修正したり、行動を制御したりできるようになると主張している。

また、集合的罪悪感 (collective guilt) が、対立している集団間の関係改善に役立つ可能性も指摘できる。集合的罪悪感とは、自分が所属している集団のメンバーが他の集団に対して与えた損害について、被害者や第三者から糾弾された場合に、集団の一員として感じる罪悪感のことをいう。この概念は政治哲学とのかかわりが深く、歴史上の不正 (たとえば、戦争中の大虐殺) に対する公式謝罪や補償の是非をめぐる議論のなかで取り上げられることが多い。集合的罪悪感の喚起は、不正を行った者が自分の所属する集団内にいる (いた) と認めることを必要とするため、内集団に対するイメージの悪化をもたらすかもしれない。しかし、この感情は同じ不正が再び起こるのを防ぐうえで、重要な役割を果たす可能性がある。

罪悪感の喚起は、失敗から学び、行動の改善 (偏見のない反応) を促す契機となるのかもしれない。広く感情が、ステレオタイプが引き金となって生じる偏見や差別、ひいては集団間の関係性の改善に対して及ぼす影響については、今後のさらなる検討が必要であろう。

---

1 家父長的ステレオタイプと訳されることもあるが、本稿では温情主義的ステレオタイプという訳に統一した。

## 文 献

- Devine, P. G., Plant, E. A., Amodio, D. M., Harmon-Jones, E. & Vance, S. L. (2002) The regulation of explicit and implicit race bias: The role of motivations to respond without prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 835-848.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. T., Glick, P. & Xu, J. (2002) A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perspective status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- Fiske, S. & Stevens, L. E. (1993) What's so special about sex?: Gender stereotyping and discrimination. In S. Oskamp & M. Costanzo (eds.), *Gender issues in contemporary society*. (pp. 173-196). Newbury Park, CA: Sage Publications.
- Glick, P. & Fiske, S. T. (1996) The ambivalent sexism inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 491-512.
- ハンドラー・D / 河野万里子 (訳) (1992) 『フィッツジェラルドをめざした男』講談社 (原題: *The man who would be F. Scott Fitzgerald.*)
- 池上知子 (2009) 「社会システムの正当化における相補的ステレオタイプの役割」『日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第 56 回大会合同大会発表論文集』464-465.
- Kay, A. C. & Jost, J. T. (2003) Complementary justice: Effects of "poor but happy" and "poor but honest" stereotype exemplars on system justification and implicit activation of the justice motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 823-837.
- 野寺綾・唐沢かおり・沼崎誠・高林久美子 (2007) 「恐怖管理理論に基づく性役割ステレオタイプ活性の促進要因の検討」『社会心理学研究』23, 195-201.
- 野寺綾 (2009) 「社会規範遵守の動機づけがジェンダーステレオタイプ活性化に及ぼす影響」博士学位論文 (未公刊)